



繪本琉球軍記

初篇

六



~ 13
3554
6



門 へ 13
號 3554
卷 6



繪本琉球軍記卷之六

目錄

佐野帶刀討取鰐鮫

帶刀根武藏守勝氏

琉球國王四時淫樂

加納濱田欺陳文磧

繪本琉球軍記卷之六

早稲田大學図書館
昭 33.11.10 受
藏 書

川島諸將到着要溪灘

要溪灘合戦

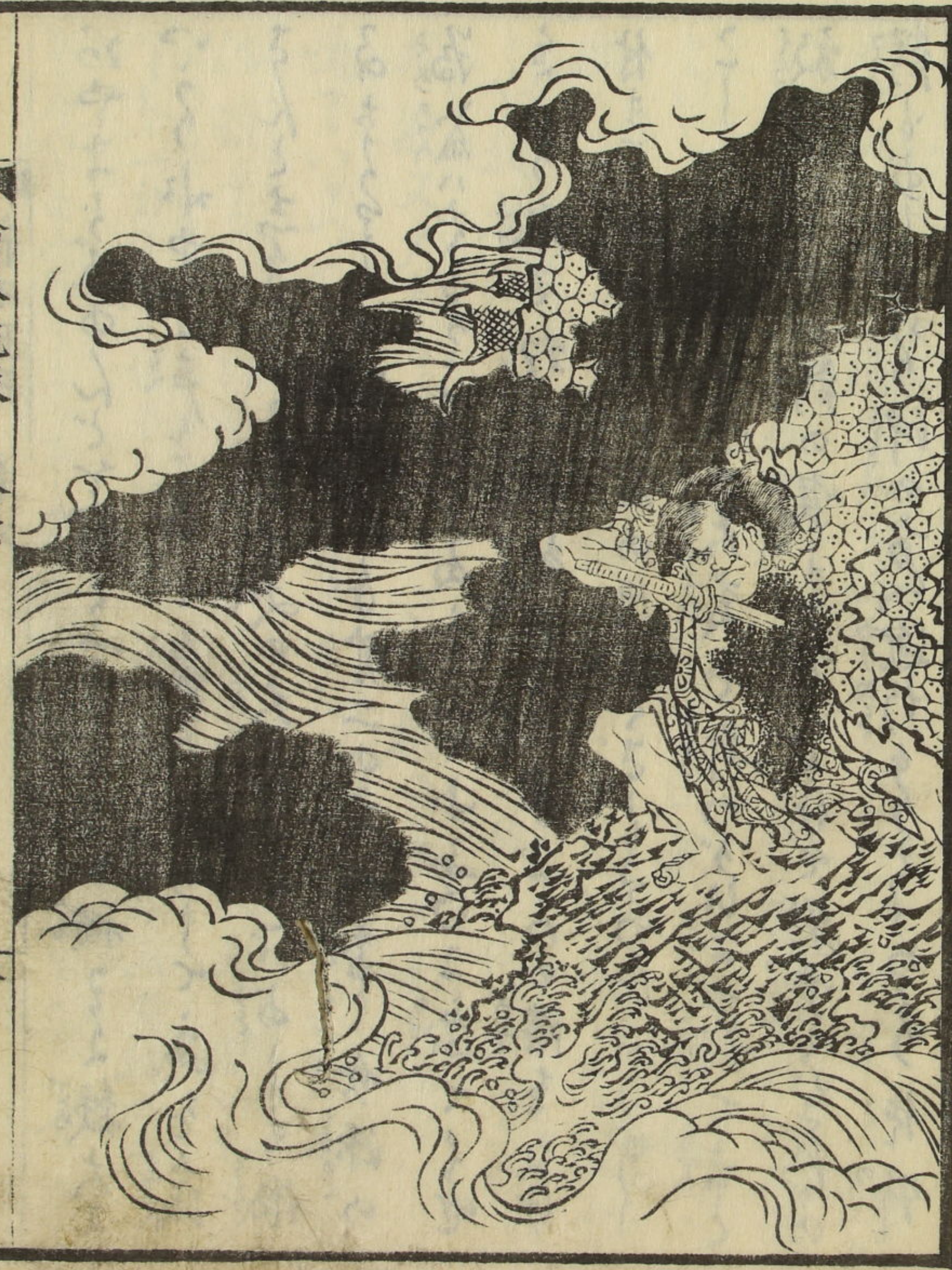
附 琉將卻政顯猛勇

<p>本流球軍記初篇</p>	<p>日</p>	<p>本流球軍記初篇</p>	<p>本流球軍記初篇</p>	<p>本流球軍記初篇</p>
----------------	----------	----------------	----------------	----------------

繪本流球軍記初篇 卷之六

佐野常刀一横勝氏

去りては薩筋の流軍勢が直夜をうらむに舟をいそぎ
 舟三日目よびびりて大船密久船をこれに五五水面に
 いらまへが備うる大波左右よりきこえ大いそぎ舟の船
 級海上よりわらわを火炎のくさ口をひらき急まらう一船の
 小船をくつがぬし士卒十人なりと春のくくす火の
 かんぞまらぬおさるのくさまのくさるのくさるのくさるの
 いのり内より銃炮をこけくふの艦よりまのて彼船
 級の口を目づけねむいをかかへんく切くまらう



龍宮物語
第六
龍宮物語
第六
龍宮物語
第六

ちやまらばのんどを射とや〜とらば彼も二艘大よ
 いり水中に声を殺し身をおどらして舟を激
 さんと志ろきども二十丈の大船をまじりおしも働
 りたりとらけ時船も廿二の大船をまじり女隊の
 舟もいちううけあさぬをえておどろきよきてせ
 たり吼もねも船船目げもごころの徳をふけ
 付も二艘まらば右の目もごころの徳をふけ
 こしと舟もいちううけあさぬをえておどろきよきてせ
 殺ていちううけあさぬをえておどろきよきてせ
 船もいちううけあさぬをえておどろきよきてせ

常刀ハ才六薩のちよ佐へ船をよめてとらば
 二立出今船ごめの迹りを見て大よるごころおのひ
 りて水練の達人ちよ佐へ船をよめてとらば
 眼もいちううけあさぬをえておどろきよきてせ
 船船又大なる口とひらと抵抗の〜と牙をあらう
 吼もいちううけあさぬをえておどろきよきてせ
 佐役もいちううけあさぬをえておどろきよきてせ
 了を一かきせと突ひらむ雨を舟入て後の並舟を
 きんぐと突ひらむもの船船大よらり今の十分

傷くより死に終ふ事刀がよし打たざる忠久これを
 見て大よよろこび命じて破鎧ごめを小船より上らせ同
 舟くわめて内渡りるに世に及びしと後ちうききバも侍波を
 刷せ先帝刀の返して休足せし其後仁本武流を
 拓と置る見賞の御法さへいと命せらまききバ備
 氏色を正して中々ハハ戦場又むらひ君の言あおつて
 高欲より命を投て働こそ大丈妻忠臣もまのべ
 常刀勇たのんで大切なる力をこせき根魚とせと
 幸ふ是匹士の行はして大丈夫のうござる不勇を生ん
 ちと後功をえて命をこせざる程より門で福なること

ちうも君よりはは況やまハ一時の戯より一軍を
 以て賞さへりるに志しぬも是を賞せんバ武とす
 むるのころと先ん是の只君自ら命をさす賞は
 ちういんこそ百南の理とて一と得る色ちう云上
 々是のた久実もと同せしと連又常刀を百おし頻
 りとせしとてこれを称賞しむるに磨賞としてた刀
 一帯を下しとすし又あかたをいれまねとらつて只管
 ちう勢と賞せらまききバあかたのちのちのちのち
 酒宴を催せらまききバ刀の君を謝してやがてあかたを
 ちうとてこじが詔よりへまききき後常刀備氏をちう

言上せし語をすてんの申大よりして勝氏を
 懐むるいうちまもバカくするにさや君一匹を
 下さきし解教のやうく外行をさぞなまると
 思まらんといひ命を投ぐ海申に飛入幸ふしく
 付たるとハ備え君への御見報しを思はせし
 然るを猶氏かたさして近まとい切をきておとさ
 ぬちんぞといふはて奇怪にえりく家琉球に
 玉子まのハ人よりさき一勇をりハ一財に後方
 の城をさふた彼に赤面さくきんと是より
 いさく武蔵守をくくさる

尚寧王四時淫樂

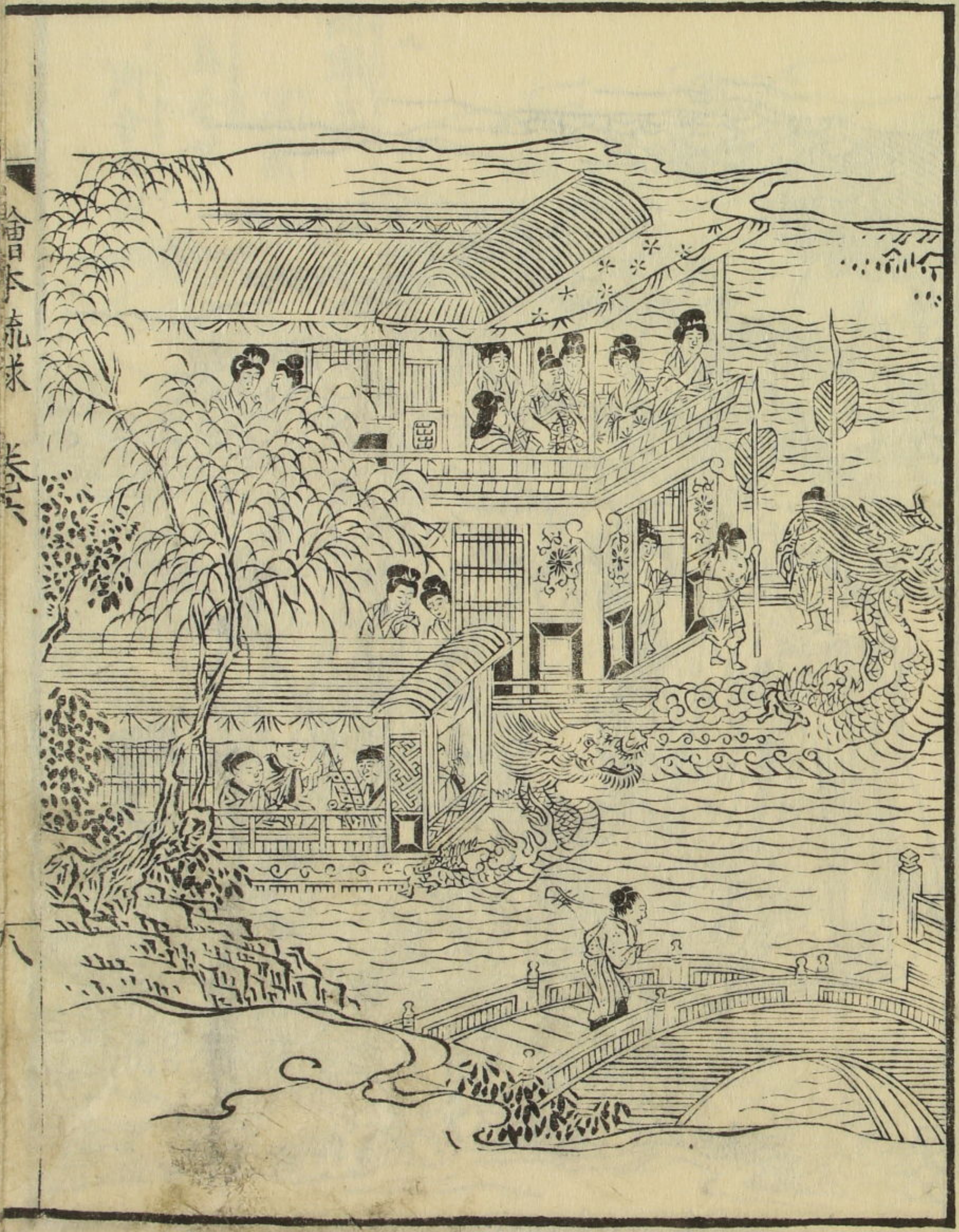
賢を愛くして色を好みくを人の激ちりり愛
 琉球國王尚寧王十八尚明王の長男ありて
 悪くはれといふも他家久後を承けて五穀よく
 此の平董鐵履の忠告く國中大に豊たるとい
 忽ち玉の危きをたまき並夜淫樂酒宴をりして
 不就心し別を宮に海を引入て水あし山と開て
 ハ系と作て異に天羽種毒のさきとちりい大なる毒を
 送て玉に彫て柵と令て彫ておとみ市より
 棟をいへ一千人を入つたり又よく三百里の外をさび

数百人の美女をばらばらとてお尋ねするの御交を御
 ぞ堂にたまたまの國王とてまへ海客の御交を御
 多の美人をばらばらとてお尋ねするの御交を御
 りてむ王自美令の盤の中より二三の襟をばらばらと
 数百の美人をばらばらとてお尋ねするの御交を御
 さいてさう色香やうと傾玉のまをさうと名をばらばら
 たりてお尋ねするの御交を御
 花やうと襟の止りてお尋ねするの御交を御
 水香やうと襟の止りてお尋ねするの御交を御
 目者よハ玉と飾りて襟をばらばらとてお尋ねするの御交を御

竿をばらばらとてお尋ねするの御交を御
 螢をばらばらとてお尋ねするの御交を御
 ふと乃 衣を箱の花をさうとてお尋ねするの御交を御
 たゆと止りてお尋ねするの御交を御
 光り止りてお尋ねするの御交を御
 幸とてお尋ねするの御交を御
 是とてお尋ねするの御交を御
 さむとてお尋ねするの御交を御

札をうけ日新月日新又日新之令字を彫入美女と
 もも湯中へ浴して戯むと云ふ是と驚き令と号け
 又乃々所ハ山河ニかして民のたげををかしむるに
 費せども奢るをきくはかくと酒色をめつら又する
 乃乃乃仲尉賈美と云ふのれ女毛鳳といふ美人を
 深く寵く是を天龍夫人と号し丸けりいと飾り
 め々し美麗化し越々一度笑ハ百の媚たる
 六宮の粉黛をままむく沈魚落丁の姿風容と
 して昔の古の西施揚州妃より劣るうれば尚寧
 王の寵愛もどりたく只淫樂をまゝしてさうに

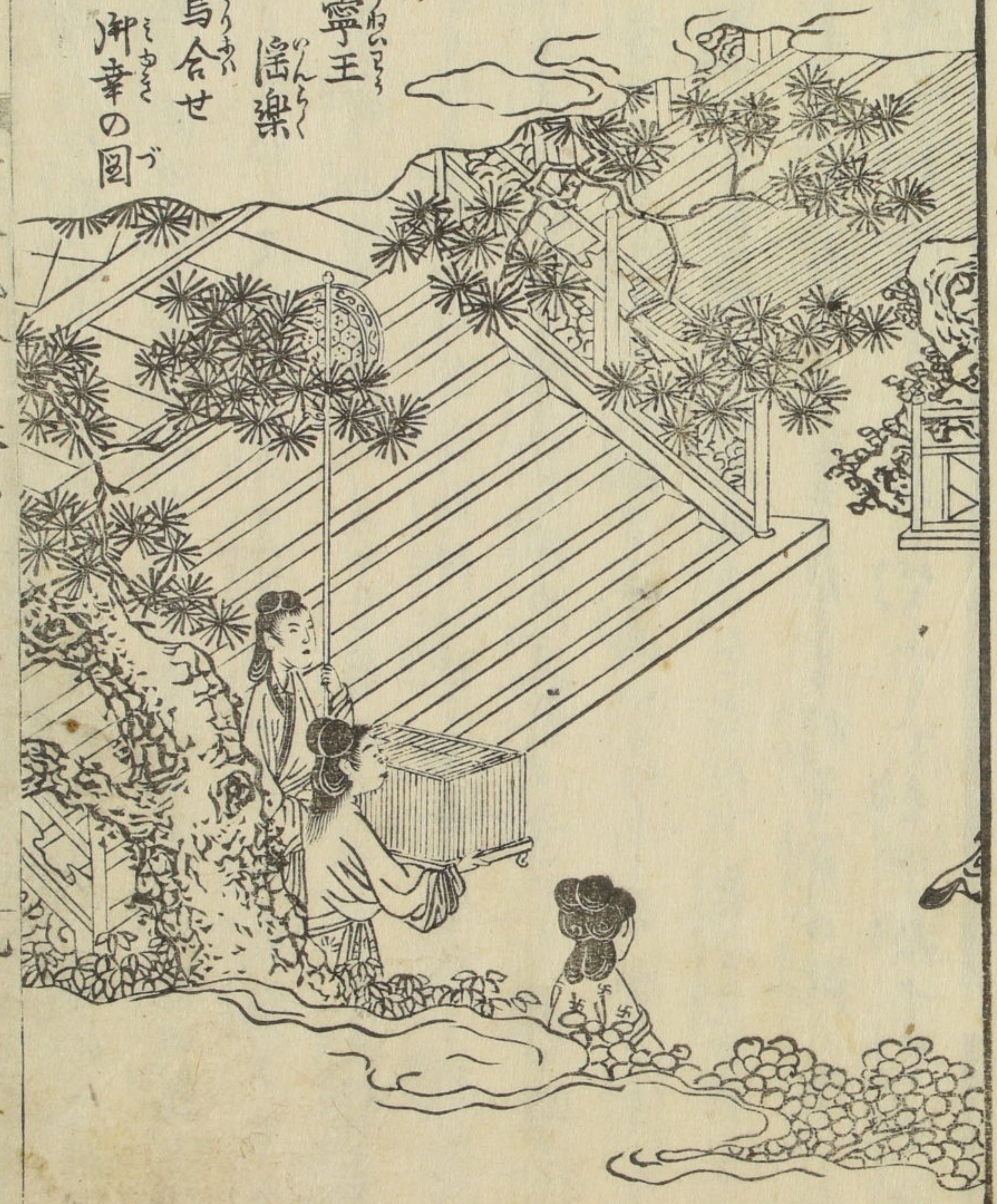
圃政を治り首里の王城より千餘山まで六十里の
 花舞なる殿舎をめぐり建列の奢侈日々増
 多し國の費民の歎大方をけけたやや々々
 康至三年ひざる旅跡月立せし春三月東方客星
 其外やや々々も多りうと云ふ群臣悉く王家の
 等閑の事より乃乃乃圃若政を所ハ遮日月よりなる
 弊のあらまじき事なれば各々宮中へ入る
 諫言に大史遂李冬と云者進んで奏しうの臣が
 代ト遊と以て縁を合む禍福とてく奏せしん
 ありべうに某壯夜天文をみる客星東方に



琉球王
の
遊
園



尚寧王
鳥合せ
御幸の図



必しとおし 後より武里よりかゝり 舟盛よりあせし ねおや
 海上波きづるより 天氣あると 候時 ちりり 法軍
 船中の旁より 既より六日を経て 修より 忽々 此の今
 二日 琉球の漢要 漢灘より 船と 此の 積り ちりり
 村に 仁本 武藏 舟 務氏 官本 加納 隼人 桂田 始乃
 五人をす 務と 汝二人 先を 要漢灘より ちりり 吉崎
 濱田と 一所より ちりり 計より ちりり 既後
 日ハ五月朔日之け日 ちりり 船と ちりり ちりり 要
 計をおし 二人を 又 ちりり 舟より 出させ 候め
 ちりり 先を 要漢灘より ちりり 又 甲斐

務氏ハ味この 務おし 下知を 務し 船と ちりり ちりり
 船幕おし ちりり ちりり 舟より 分り ちりり ねおや
 ちりり 村に 船と 舟より ちりり ちりり 琉球も ちりり
 ちりり 務おし 舟を 務し 日比の 舟勇を ちりり
 舟今 船と 舟を ちりり 船と 一遠目 船と ちりり
 軍船を ちりり ちりり 船と ちりり 又 二百余人の
 船と ちりり ちりり 船と ちりり 船と ちりり
 ちりり ちりり 舟を 進む 船と ちりり 船と
 船と ちりり 舟を 又 船と ちりり 船と
 唐洲の 城と 舟を ちりり 船と 魏伯と ちりり

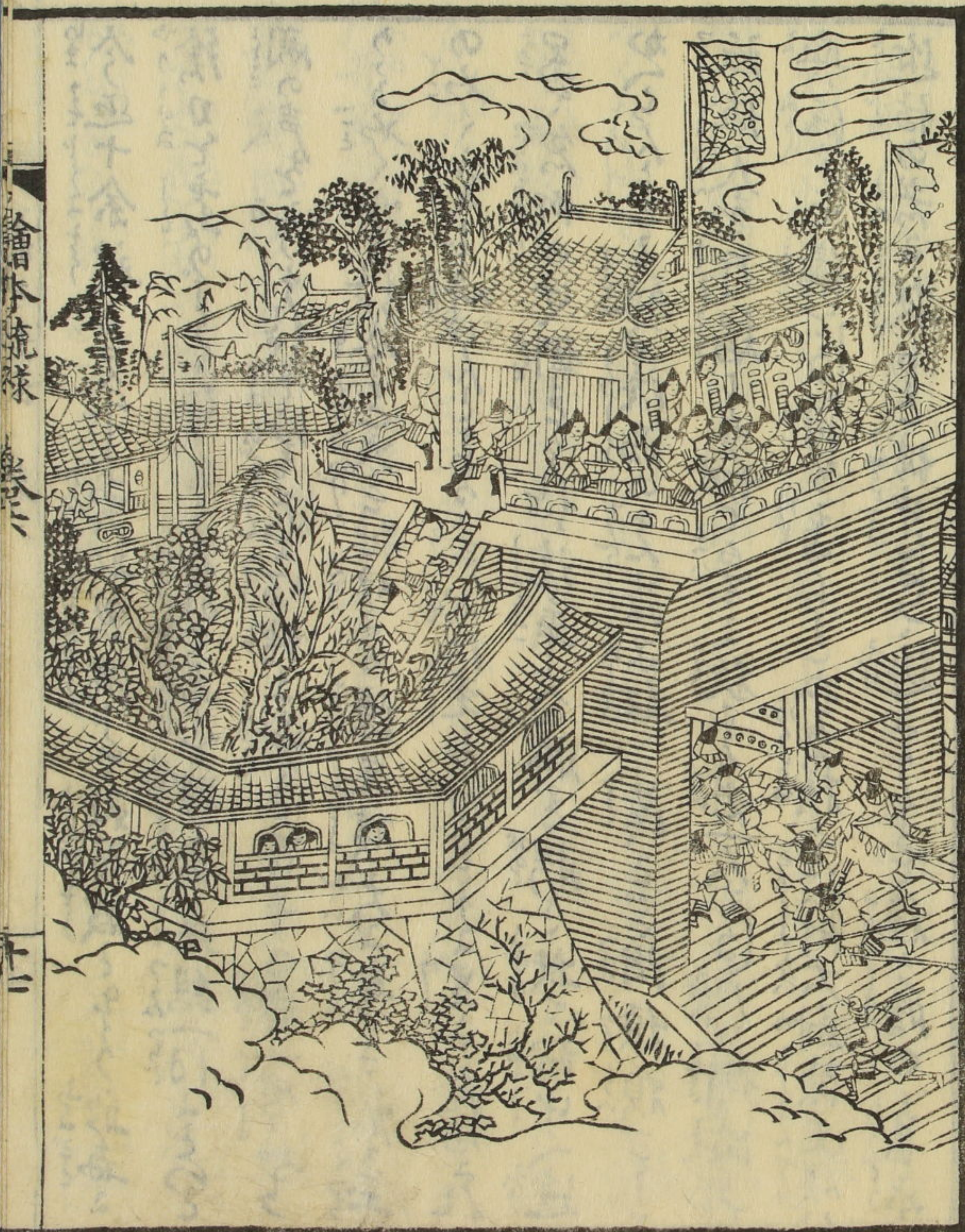


加納
 漢田
 陳文
 欺く
 目

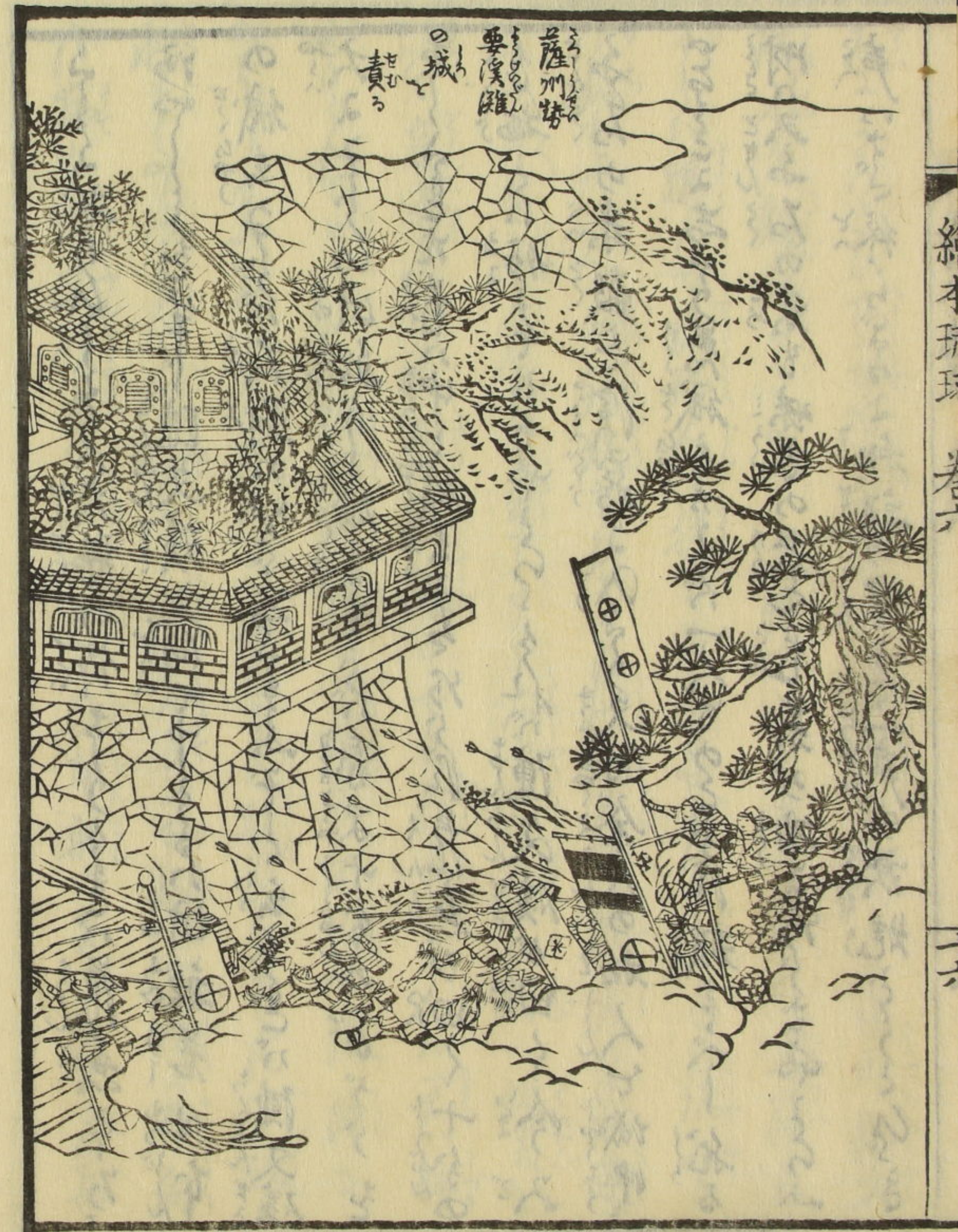


皆日本を味とけ國の仁惠を去りて述とる者數百人
 及べと去りての(在)おしけ國へ入らんす却つておそき
 けりとのみて皆沖之船をつらとせん某木をりてけり
 大王とねいひよく琉球の民とらんすとのぞきともし
 在義引あまのいさひ先きを携へらん米穀半を
 玉王へ献て中べりりす入さるるおいては再び日本へ返
 了らん亦存らん一竹まの玉(成)も述仍んべり何ドくバ
 け國の民とらんすこそ死りんと候を流して美しや
 うの中とまは得司い云と成て花毒と告ぐしが花毒中
 々るは海ホがねづむたうといくまふ不候よハやり入けは

王城の天文方李参とのりの天文をえて大王と奏し
 述もゆゑ外あつるは冠さるるあへりてのさあつる
 ども國王ハけりさるるはあらひりたるるども群臣類
 是をさるるあて今四方の城に福をすり一要害とまを
 すり防徳の司名すましくちり航と商城へも使節本
 王按司陳太尉と將を海ホをも一竹味ゆりちるる
 ども元来織とるるあへりたるるは海ホと
 すりけ國の止りては竹味の後國王とねらんもかつり
 いさるる桂田又ちるるあへりたるるは海ホと
 是りてあつるいさるる先彼米穀等某木人質と取來



繪本流珠 卷六



薩州
要溪
の城
責

繪本流珠 卷六

爲りし侍周院に事をもて侍りし武勇と感ずけ此の
 通ト人を置ししり彼者のいぬのいぬのぞとたひりたれが通ド
 人の曰く彼はけ城下の同人のいぬのいぬのいぬのいぬのいぬの
 ありし知しり武勇を好む力能きを侍りしあま吉平の代を
 うらみ人にかつりし中をいぬのいぬのいぬのいぬのいぬの
 りしし人かすむいぬのいぬのいぬのいぬのいぬのいぬの
 都名の政とのいぬのいぬのいぬのいぬのいぬのいぬの
 忠棟も大なるいぬのいぬのいぬのいぬのいぬのいぬの

倉本琉球軍記卷之六終

